被災地支援ー私たちにできること

1.支援の種類

直 接的な支援

・現地でのボランティア活動
(片付け、清掃、炊き出し等)
・傾聴ボランティア
・写真洗浄ボランティア

間 接的な支援

・「欲しいものリスト」等を活用した寄付
・募金(義援金・支援金)
・現地の物産の購入、観光

もっと支援について知りたいなら..

災害中間支援団体　活動

📋中間支援団体...
被災地のニーズを調査し、支援者とのマッチング等を行うなど支援活動を調整する団体

💡ボランティアでの活動はあくまで手段の一つ、その本質は被災者の心に寄り添うこと
→被災地支援に必要なのは医療・物資だけではない

2.支援の両輪

災害支援は、物資・制度による課題解決と、孤立を防ぐつながりの支援という両輪で進みます。両者が揃うことで、被災者は生活だけでなく生きる力を取り戻し、地域の復興の原動力となっていきます。

制度や物資が整っても、人や地域が災害前の生活に”そのまま戻る”わけではない

課題解決型支援

具体的な課題解決を目指すアプローチ

生命と生活を守る

物資提供、制度手続き、現場活動など

”生活を立て直す力”

伴走型支援

つながり続けることを目指すアプローチ

傾聴、アウトリーチを重視

集会所の運営、地域ラジオなど

”生き続ける力”

🚶アウトリーチとは🚶♀️➡️
支援を必要とするがなかなか声をあげられない人のところへ支援者の側から積極的に出向いて支援を届ける活動

災害直後、他地域に避難し未だに地元に帰還できない高齢者、災害をきっかけに地元を離れ、そのまま新しい生活を築き、”戻らない”という選択をする家族も少なくありません。すぐに前を向いて歩いていける人もいれば、気持ちの整理をつけるのに時間を要する人も多くいます。災害後の地域には、様々な背景を抱えた人々が存在します。だからこそ、目に見える課題への支援と目に見えにくい部分を支える支援、この両輪が不可欠です。

3.神学を学ぶ者の立場から ー「隣人」として関わる

能登半島被災地支援プログラムを受けて、神学部として自分はどのように被災地に関われるのかを考えてみました。

「『隣人を自分のように愛しなさい』」(マタイによる福音書22章39節)

①尊厳 Dignity

被災者をただ支援の対象として扱うのではなく、一人の主体として尊重する

②共にいる Presense

一緒になって考える、空間・沈黙をともにするなど、復興に向けてともに歩みを進める

③聴く Listening

相手の話に耳を傾け、共感・対話し、寄り添うことで、心の居場所をつくる

④希望 Hope

双方向的な関係性を構築することで、両者が他者の「隣人」となれる可能性を発見し、次の支援へと繋げる

●善きサマリア人のたとえ(ルカによる福音書10:25-37)

ある人が町へ向かう途中、強盗に襲われて道端に倒れました。祭司やレビ人といった仲間は、宗教的な規則に違反することを恐れて、彼を助けずに通り過ぎていきました。しかし、そのような中で、当時社会的に敵対し、憎みあっていたはずのサマリア人の旅人は立ち止まります。旅人は傷を手当てし、彼を宿屋まで運んで世話を続けました。さらに、宿屋にお金を払い、彼が回復するまでの責任を引き受けました。

これはイエスが律法学者に「隣人とは誰か」と尋ねられたときにしたたとえ話です。このたとえ話である人の隣人となったのはサマリア人でした。イエスは最後に私たちに向かって「行って、あなたも同じようにしなさい」と説きます。

ここから、立場を越えて困っている相手のために行動することが隣人愛であり、行動次第で誰もが隣人となれることがわかります。

「隣人」とはただ物資を届ける相手ではなく、共に痛み、悲しみ、喜び、希望を見出す存在です。関わり方は様々ですが、「隣人」となることは誰でもできることです。ここで提示した視点はあくまで数ある関わり方の一つです。被災者にとっての「隣人」となるために私たち一人ひとりにできる関わり方を考えてみませんか。

4.最後に

あなたが今学んでいることからどのような支援ができますか？

ー支援は「特別な誰か」だけが行うものではありません。
学ぶ私たち自身にしかできない支援の仕方があります。

最後まで読んでいただきありがとうございます！
被災された方々を思い馳せながら、ぜひ考えてみてください。